

家庭、保育所、幼稚園 (二)

倉 橋 惣 三

忙しい母、働く母、不在勝ちな母が、我子のために欠けるところの主要な点は、母乳の問題ではない。自らの胸ではぐくむことの欠けることである。単なる母乳の栄養問題ではない。母の胸による。膝による、腕による、プレストフィーディングの機会の少ないことである。母の胸は、たゞ母乳の泉だけではない。我子との感情のつながりに、温かく、和かく波うつ、微妙に漣うつ春の池である。その小波の伝わるところ、母の情味であり、人間栄養であり、人間の養素である。母乳を分析して牛乳に比較するのは、我子の肉となり骨となり皮となるアルファベットに過ぎない。その以外の母のやしないが、母のプレストフィーディングの価値にある。乳房をふくませながらの母と子との笑顔の溶けあいにある。我子の生長の母の喜びにある。我母の愛情に対する我子の信頼にある。それなしに人間は人間に育たないのである。それこそは、牛の乳にない人間栄養であり、羊の乳にない栄養である。人間の完全栄養といえるものは、字義通りそこにこそある。人

間的完全栄養は科学的完全栄養では足りないのである。家庭を補うものとしての保育所の要訣も亦、こゝにありとする。

昔の保育所には、工場に附属し、母が子どもの哺乳に、時間を定めて我家に帰るものが多くあった。この仕方は、今日の大規模工場には行われ難いところもあり、その方法自身にも欠点がないとはいえないが、ブレストフイーデングの点に於ては、よき方法とせられるであろう。絵に描いて見ても、多くの母が我子のために時間をきめて家に帰る光景はほゞえまじい光景といわざるを得ない。又祖母なり、姉なりが、幼児を抱いて工場の母の許につれて来る光景も、ほゞえまじい。しかも、今日の工場においては、そうした、我子への人間時間も許されないのである。工場管理上の重要々件であろう。或は工作能率過重の悲劇か。

保育所の教育効果といえは、乳児に母を与えることを主とすべきである。半才、幾月の後に至つて、始めて我母を与えられることは、仍く母の子の最不幸とするところ、また、保育所として、その教育の始めを失わせるものである。しかも、母から与えられる人間性の教育なくして、何んの幼児教育あらんやである。かすかにして深きもの、その時極めて小なる如くして、後に至て教育性の極めて大なるもの、始めて母を経験する如きはないであろう。つまり保育所の教育価値は、教育ともいわれざるどころにあるのである。

乳児期の『教育と言われない教育』に何があるのか。(1)、皮膚覚の清潔の快感。(2)、有機感覚の健康感等謂わば生活感覚の良習である。